

西南学院大学文学部
英文学科主催講演会

ことばと文化の饗宴
——『不思議の国のアリス』をめぐって——

2020年 1月16日 木曜日 16:50~18:20

- ・講師： 安井 泉(筑波大学名誉教授)
- ・会場： 西南学院大学中央キャンパス 2号館4階 407教室
- ・開場時間 16:30 ・参加費： 無料
- ・対象： どなたでもご参加いただけます。 事前申込不要。

現在、福岡市美術館で開催中の「不思議の国のアリス展」。
この展覧会の学術監修者、アリス・シリーズの翻訳者とともに味わう
『不思議の国のアリス』の「不思議な魅力」。



講師のプロフィール

安井 泉(やすい いずみ)
筑波大学名誉教授、
日本ルイス・キャロル協会会長

著書に『英語で楽しむ英国ファンタジー』（静山社）、『ことばから文化へ』（開拓社）、編著に『ルイス・キャロルハンドブック』（七つ森書館）、訳書に『地下の国のアリス』（新書館）、『鏡の国のアリス』（新書館）、『子ども部屋のアリス』（七つ森書館）、『対訳・注解 不思議の国のアリス』（研究社）など多数。

▶学術講演会に関する問い合わせ先◀
西南学院大学文学部英文科 一谷 智子
ichitani[at]seinan-gu.ac.jp ([at]を@に置き換えてください)

【講演の概要】

ことばと文化の饗宴——『不思議の国のアリス』をめぐる——

東映株式会社文化事業室主催の「不思議の国のアリス展」は、2019年春の神戸の開催を皮切りに、松本、横浜、福岡、静岡、名古屋、新潟と全国7箇所をめぐる展覧会です。現在福岡市美術館で開催されていますが、日本で開かれたルイス・キャロルやアリスの展覧会の中で、展示品は質量共に右に出るものはないと思われるほどの本格的な展覧会です。この展覧会の準備段階から、学術監修を行っています。2019年暮れから1月にかけてと、7月末から8月末までに、合計50日余りにわたり、個人的に英国を訪問し、『不思議の国のアリス』の著者ルイス・キャロルの足跡を訪ねました。今回の講演では、英国の土産話も交えながら、『不思議の国のアリス』という物語が、この作品が誕生したヴィクトリア女王時代の文化を、欲張りすぎではないかと思われるほどに取り入れて成立していることがわかってきました。一方で、『不思議の国のアリス』の英語はやさしそうに見えるかもしれませんが、実はかなり難しい英語で、英文法の授業で習ったことがすべて出てくると言ってもよいものになっています。

ルイス・キャロルは4つのアリスの物語を書いています。このすべてを翻訳し解説する機会に恵まれました(『不思議の国のアリス』は『対訳・注解 不思議の国のアリス』(研究社, 2017)。『地下の国のアリス』と『鏡の国のアリス』は新書館(2005)、『子ども部屋のアリス』は七つ森書館(2015)。講演では、the White Rabbit, Mock Turtle, Knave, Duchess, Cook, Mary Annなどの登場人物の名前の秘密に加えて、物語に出てくるDrink me!やEat me!, Why is a raven like a writing desk?(ワタリガラスと掛けて書き物机と解く、そのころは)、という答のないなぞなぞ、Digging for apples, yer honour!(リンゴを掘っておりますだあ、だんなさあ!)など具体的に英語表現を取り上げながら、それぞれの表現に仕掛けられているヴィクトリア女王時代の文化や英語の興味深いからくりも取り上げることにします。物語ではアリスの背は伸びたり縮んだりするのですが、人の背の高さはHe is six feet tall.のようにtallを使うはずなのに、物語ではアリスの背の高さの描写に、英文法では「人の背の高さの描写には使うな」と言われていたhighが一貫して使われています。その理由を解き明かしましょう。mine(鉱山)、mad(気がへん)、Mock turtle(ニセウミガメ)などがどうして登場するのかも考えてみます。アリスが後を追ったシロウサギはイングランド人と言われますが、実は作品にはウェールズの香りもふんだんに盛り込まれています。作品は、ヴィクトリア女王時代の文化と一体化しており、郵便の発達、鉄道発達、海水浴など、当時の文化が有機的につながり合って物語を支えているのです。

最後に、学問することのおもしろさと勉強をつづけるためのコツなどをお話します。